

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No.25 2021*

文学教材を用いたReading指導の検討  
—大学英語学習者の反応を中心に—

中邨 早希

Examination of Reading Instruction  
Using Literary Teaching Materials  
—Focusing on University English Learners' Response—

NAKAMURA Saki

長崎外大論叢

第25号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2021年12月

## 【研究ノート】

文学教材を用いたReading指導の検討  
—大学英語学習者の反応を中心に—

中邨 早希

Examination of Reading Instruction  
Using Literary Teaching Materials  
—Focusing on University English Learners' Response—

NAKAMURA Saki

## Abstract / Short Outline

As is well known, in recent English language education, the Courses of Study call for “nurturing practical communication skills”, and there is a trend toward emphasizing communication. Within this trend, quite a few people have negative views regarding the use of literary materials in reading instruction. In fact, many of the leading teaching materials in university English education have shifted from literary works to newspaper articles. However, is it really the case that literary materials do not facilitate the “cultivation of communication skills” and are not suitable for reading instruction? Based on student course surveys, many students feel interested in story and it encourages them to study English or read other American literary works.

## キーワード

文学教材、大学英語教育、学習者の反応、リーディング指導

## 1. 英語教育における文学教材の現状

歴史を振り返ると、かつて語学学習の教材は文学教材が主流であった。日本の英語教育では、学習者が英語を満足に使えるようになっていないとの声が高まり、高等学校学習指導要領（1999）では、第13節外国語の第1款目標において「実践的コミュニケーション能力を養う」（p.379）ことが明記された。これ以降、コミュニケーションを重視する傾向はますます強まっている。木村博是・木村友保・氏木（2010）によると、コミュニケーション重視の影響は大学英語教育にも及び、「総合教材」が出現した。「比較的平易なテキストを選び、発音・語彙・文法などの着眼点を解説してテキストの読みに関するQ&Aを行い、最後に関連する作文までを行うタイプの教材である。平成5年のある国立大学の教養課程では、総合教材が実に全体の約7割にものぼったという。」（p.6）木村が述べる平成5年のデータは多少古い情報ではあるが、2021年現在でも著者のもとに届く大学英語教育テキスト販売目録は確かにその多くを「総合教材」が占めており、現在もその傾向に大きな変化が見られないと言っていだろう。「総合教材」は主にニュースや新聞記事、会話文から英語を学ぶ構成になっており、文学教材を用いた指導を検討してもそもそも選択肢が少ないという状況である。特にリメディアルや

学びなおしを意図した場合、文学教材は忌避される傾向があるのか、動画や写真が多く掲載された色鮮やかな「総合教材」が提示されていることが多い。

こうした教材の偏りが見られる状況について、西原（2010）は以下のように指摘している。「人間は生活する上で文学（文学言語）と頻繁に接点があるため、文学を取り扱わない英語教育は極めて偏った外国語能力を養成していると言えるかもしれない（言語学、文学の経験的研究の研究成果より）」（42枚目スライド）西原のいうように、文学を教材に用いることを回避し続けられれば、偏った外国語能力を養成していくことになる可能性がある。

岡田（2013）も英語教育の内容が多彩になってきたことに触れながら、以下のように指摘している。「高等学校や大学の英語の科目も多彩な科目が取り入れられ、英語を広く学べるようにカリキュラムが整えられている。また高校の英語の教科書も、以前は文学的な内容が中心であったが、今ではコミュニケーション、言語文化、時事問題等、様々な内容が取り上げられるようになった。英語教育が多彩な内容になってきたことは、国際化時代の現在を考えると望ましいことである。ただ忘れてはいけないのは、学校教育の中で英語を教える意味である。」（pp.1-2）とし、多様な教材を用いる傾向は認めつつ、英語教育において精神性を養うことも忘れてはならないと警告している。

文学作品が教材として用いられることを回避されている理由として、木村ら（2010）は以下のように分析をしている。「文学作品と対照されるノンフィクションの代表例として新聞の報道記事を考えてみると、記事の書き手は24時間の間に起きた出来事ないし事件を正確かつ客観的に記述する。書き手は主観的で価値評価を内包する形容詞や福祉を避ける傾向にある。報道記事はほとんど無署名であり、書き手が個性を発揮することは不可能に近く、また期待されてもいない。これに対して、フィクションでは書き手が虚構の世界を構築して独自の言語表現を生み出すべく心血を注ぐ。独創性こそが文学テキストの特質といってよい。その結果、しばしば「難解」で非実用的であるところから文学作品は「リーディング」教材としては敬遠される傾向にある。」（p.10）確かに学習者の視点では、正確かつ客観的に記述された新聞記事は行間を読み考察する必要があまりない。また映像として配信されているニュースであれば記事を読解する必要性はさらに下がる。加えて、インターネット上で日本語に翻訳された記事を閲覧できる場合（主要なニュースであればおおよそ翻訳版を見つけられる）、英語を読まずとも内容理解をすることが可能になってしまう。しかしこのような「文学教材＝難解」というイメージだけで、文学教材の使用を忌避するのはいささか性急過ぎるのではないだろうか。先ほどの西原（2010）、岡田（2013）の引用で示したように、多様な教材を用いることで学習者の外国語能力をバランスよく伸ばしていくことが必要である。

## 2. 文学教材の再評価

現在多様な教材が用いられるようになったが、文学教材がその枠組みにあまり入らないことは一章で述べたとおりである。コミュニケーション重視の風潮の中で文学教材を回避する傾向は日本だけのものではなく、欧米においても同様の傾向がみられた。ただ欧米ではその後、1980～90年代以降から文学教材を用いた英語科目指導は再び評価されるようになった。しかし、日本の英語教育界では再評価される流れがそれほど大きなものになってこなかった。

久世（2011）は文学教材を用いた英語教育について「想像力豊かに意見交換することで、文学の味わいが増し、学習者は解釈の可能性の広さに気づく。視野が広がり、「楽しい」と感じられるように

なるのである。学習者の意欲を高め、自立した学習者を育てるのに、学習を「楽しい」と感じることは、最良のモチベーションとなるだろう。このように、文学を教材とする共同的な学習は、英語学習に非常に有用であるといえる。」(p.96)と述べている。文学作品を読むことで得られる「面白い」「はらはらする」「考えさせられる」「感動する」「別世界に入り込める」といった何かしらの感情こそが、文学教材の魅力であり強みである。学習者の学習意欲を高め維持することはすべての教師が意識していることだろうが、文学教材はその一助となる可能性を秘めている。

また岡田(2013)は「・・・ここで細分化された各英語分野の再統合が必要な時期が来ている。要するに内容的には文学・哲学・宗教のような言語文化で人間の生き方を学び、形態面として英語学・言語学をとおしてその機能を研究し、そして技能面としてコミュニケーションにより授業を行うことにより、内容面と機能面と技能面の充実を図り、英語教育を発展させるのが理想である。本来の学問は真理を追究すると同時に人間の福祉や繁栄に役立つものでなければならない。(下線原文)」(p.22)とし、英語教育の発展のためには文学を含めた言語文化も必要であるとしている。文学教材を極端に回避するのではなく、内容面の育成に貢献できる点にも目を向け、今一度正しく評価する必要があるのではないだろうか。

久世(2011)は「文学教材では、事実に基づく一つの決まった答えや明確な筆者の意見を持つ論説文とは異なり、たとえ部分的にでも幅広い解釈が許されることが多い。そして、その解釈をめぐる学習者がテキスト、自分自身、仲間、教師とやり取りを重ねながら、様々な言語活動を通して、読みを深めたり、自分の言葉で書いたり、話し合ったりしながら、目標言語の学習を進めることが可能である。本当の意味での「コミュニケーション能力」とは、単に生活場面での表面的かつ定型化した会話練習やオーラルの能力を強化するための訓練を行えば習得できるというものではなく、様々な状況の中でテキストや相手と話し合ったり、読み書きし合ったりして解釈を行い、創造的なやりとりを行っていく能力であると考えられることができる。」(pp.79-80)と述べ、文学教材は幅広い解釈が可能であり、協同学習の中で目標言語の学習を進めることができるとしている。加えて、コミュニケーション能力は表面的な言語の学習では習得できず、創造的なやりとりをおこなうことで培われていくものだとしている。私たちは周囲の意見を聞き、それに対して考えや感想を述べ、相互作用により新たな意見が生産され…というコミュニケーションのサイクルを日々繰り返している。「コミュニケーション能力とは何か」という大きなテーマに関わる話であるが、このサイクルをコミュニケーションのひとつとみなすのであれば、多様な解釈を引き出す文学教材は授業内でコミュニケーション活動を実現する教材になりうる。ただし、もちろん教授法には工夫が必要である。

本研究は、英語教育全体(リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング力の向上)で用いる教材をすべて文学作品にすることを指すものではない。よく扱われるメール文や新聞記事と同様に文学作品を英語教育の一教材として用いるのは効果的か検討するものである。ここでいう英語教育というのは、英米文学専攻などで開講される専門科目ではなく、専攻問わず受講する基礎科目/一般科目としての英語の授業である。

文学作品を専門科目として用いた研究は文学系で、英語教育の手法については教育・言語学系で行われてきた傾向があり、両者横断的な研究が十分であるとはいいがたい状況にある。ましてや学習指導要領にてコミュニケーションが重視されている中で、文学教材を用いた指導の実践研究は蓄積が充足しているとはいえない。そこで本研究では文学教材を用いた英語科目指導の実践と学習者の反応分

析を行う。

### 3. 実践報告

#### 3.1 授業で用いた文学教材について

前述のとおり、文学作品を大学英語科目教授用にまとめた教材は多くはない。今回、教科書として早瀬博範・江頭理江編著『Let's Learn English from American Literature アメリカ文学から英語を学ぼう』英宝社(2010)を用いた。本教材はタイトルが示す通りアメリカ文学作品を用いて英語のレベルアップを図るものになっている。つまり英米文学などの専門科目教授用の書籍ではない。練習問題はTOEICの問いを意識した構成になっており、Check the Vocabulary、True or False、Questions & Answers、Grammarから成っている。加えて、各チャプターの間には作品解釈を問うAgree or Disagree?が配置され、作品の文化的背景や作者の経歴を基に各個人で回答を検討するようになっている。またあくまで文学作品の一部分が教材になっているため、その個所に至るまでの大まかなあらすじは作品紹介として、作者を知ろう!(作者の略歴紹介)とともに示されている。

この教材を教科書に選定した理由は3つある。

一つ目は、優れた文学作品が教材になっていることである。この教材では、ルイーザ・メイ・オルコット『若草物語』、シャーウッド・アンダーソン『紙の玉』、ヘンリー・ジェームズ『デイジー・ミラー』、シャーロット・パーキンス・ギルマン『黄色い壁紙』、オー・ヘンリー『二十年後』、ケイト・ショパン『目覚め』、F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャッツビー』、マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』、エドガー・アラン・ポー『黒猫』、ナサニエル・ホーソン『緋文字』、ラルフ・ウォルド・エマーソン『自然』が取り上げられている。本研究では一学期間で『若草物語』から『目覚め』までを指導した。これらはいずれもよく知られた作品で人気があり、アメリカ文学でも傑作としてみなされている。

名の知れた作品がすべて教材に適しているというつもりはないが、あまりにもマイナーな作品であれば日本で原書を手に入れることが難しい。また、「フィッツジェラルド」「エドガー・アラン・ポー」のように学習者が耳にしたことのある著者の作品を用いて読解することで、「自分はこの作品を読むことができた」と学習者の自信にもつながると考えたからである。加えて、これらの作品は人気があるゆえに多くが映像化されていた。授業で扱うことができる箇所は作品の一部であるため、興味を持った学生が原書を入手しやすい、あるいは映像でも視聴できることにより興味の幅を広げることができた。

二つ目は、ExerciseとしてTOEIC形式の練習問題が取り入れられている点である。すなわち、本教材は文学作品の読解だけを意図したものではない。文学作品を読解して終わるのではなく、文学作品から英語を学習してもらい、TOEICにも対応できる英語力を身に付けてほしいとする編著者の意図が伝わってくる。専門科目ではなく、英語科目の授業で取り上げるためにふさわしい練習問題構成になっている。

三つ目は、適切な難易度設定がされていることである。早瀬らによると、この教材は大学初年で十分読めるよう設定されている。文学作品は本来教材用に作成されたものではないため、学習者にとって難しい単語や文構造も時々使用される。その点は編著者が脚注で解説を提示しており、あまりにも難しすぎるために学習者の意欲を削ぐことがないよう配慮がされている。このような工夫がされてい

るため、本文内では簡単な英語に置き換えるなどといった改作は行われておらず、文学作品の持つ魅力を保ちながら英語学習を進めることができる教材になっている。これらの理由により、本教材でReading指導を行った。

### 3.2 対象者

2020年4月から2020年8月にかけて、執筆者の担当するReading授業を受講したA大学32名の学生が対象である。授業回数は15回である。クラスはプレイスメントされており、目標としてTOEIC 500点以上の取得を掲げる学生が多数を占める。

### 3.3 指導の進め方

先述したように本教材には各作品の背景、作家の紹介が簡潔に記されており、作品全体を読まずともイメージがつかめるような工夫がされていた。それらを読み、毎回まず各自で予習として精読してもらった。それぞれのチャプターの内容について各自で語彙を調べ、文法構造を検討し、自分なりの解釈を準備してきてもらった。授業ではそれを学習者に発表してもらい、読解の確認と解説を行った。彼らには本授業では訳の正確さを競うものではなく、文章を自ら読み解き自分の意見や解釈を言語化することが大切であると伝えた。ニュースなどの文章とは異なり、一文が長いものや会話文で単語が省略されている箇所があったため授業内で文法的な確認も行った。また、作者の経歴について英語の紹介映像を見て補足学修をし、作品を原作とした映画やショートビデオ映像を用いて英文からさらにイメージを膨らませることもあった。

全体で内容の読解がある程度達成されたあとは、教科書のExerciseを利用し、事実発問をすることで読解の仕上げとした。その後、教科書のAgree/Disagreeを用いて作品についての意見交換を行った。まず個人で自分の考えを検討し、周囲の人との意見交換後に指名して意見を発表してもらった。個人で考えたものを発表してもらおうという流れでも問題はなかっただろうが、個人で検討する沈黙の時間の後、学習者を指名しても場が温まっておらず特に1・2人目の学生が話しづらくなることが予想された。そのため周囲との意見交換の後、教室全体が話しやすい雰囲気になった後に指名を行った。

作品についての意見交換を行う際は、解釈が正しいかどうかでなく、根拠を示しながら自分の意見を伝達できるかが重要だと指導した。発表の際にも必ずその判断の根拠・理由を述べるようにしてもらった。例えばChapter 1『若草物語』では「クリスマスのプレゼントを節約するという内容は、南北戦争中なので、贅沢などは好ましくないという作家の考えを反映している」(p.7)という問いに対して、賛成でも反対でもその判断に至った理由を何かしら学習者自身が持っているはずで、読解力だけではなく自分でその「引っかかり」に気づき言語化する伝達力も身に付けてほしいという願いがあったからである。

全体で意見を共有する際には、学習者の意見を尊重し教員側の都合がよいように誘導することは避けた。時には学習者の新鮮な意見に教員側が驚かされることや、学習者同士の意見交換の中で新たな意見が生まれることもあった。授業で読解したのは文学作品の一部分であるが、学習者はよく準備をして授業に臨み、読解することができていた。一つのチャプターを二回の授業で学修するペースで授業を進めた。

### 3.4 アンケートについて

前期授業の初回と最終回に実施したアンケートの回答から学生の反応を分析する。アンケートはGoogle Formsを用い、回答内容を研究目的で使用することに同意できる場合のみ入力を行うよう伝え、任意のものとして実施した。結果として、初回に実施したアンケート（以下、授業前）は32名、最終回に実施したアンケート（以下、授業後）は28名から回答を得た。人数に差が生じているのは、欠席者数の違いによるものである。

アンケートでは以下の項目について質問をした。

Q1 英語は好きですか。

Q2 リーディング学習は好きですか。

Q3 文学教材について、どのような印象をもっていますか。

Q4 文学教材を使う授業は、英語力の向上に効果的であると思いますか。

Q5 英語を学ぶ上で文学教材はそれ以外の教材と違いがあると思いますか。

【授業後アンケートのみ】：

Q6 授業終了後、感じたことを書いてください。

回答する際、学習者にとって過剰な負担とならないようQ1・2・3については「好きである」「まあまあ好きである」「どちらでもない」「あまり好きではない」「好きではない」の5つの選択肢から、Q4・5については「そう思う」「まあそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5つの選択肢から選択してもらった。Q6については自由記述とした。

### 3.5 結果と考察

それでは授業前32名、授業後28名の解答を分析する。

まずQ1では英語に関してどのような感情を抱いているか確認するために質問を行った。

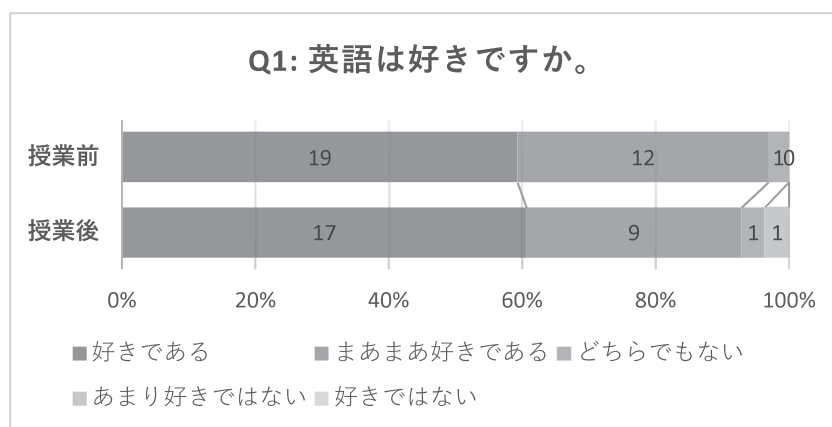


図1 Q1の結果

結果は「好きである」「まあまあ好きである」が授業前で96.9%、授業後で92.8%を占めた。先述したようにクラスの学生は中級～上級の英語力であり、英語に好意的な感情を持っていることがうかがえる。授業後に「あまり好きではない」と一名が回答した点については本授業に原因があるものかどうか判断できなかった。本授業が原因であれば難易度が高い/興味を持てなかったなどの理由で苦手意識を持った学生がいた可能性はあるが、全体として授業前後で大きな変化は見られなかった。

Q2ではリーディング学習について尋ねた。

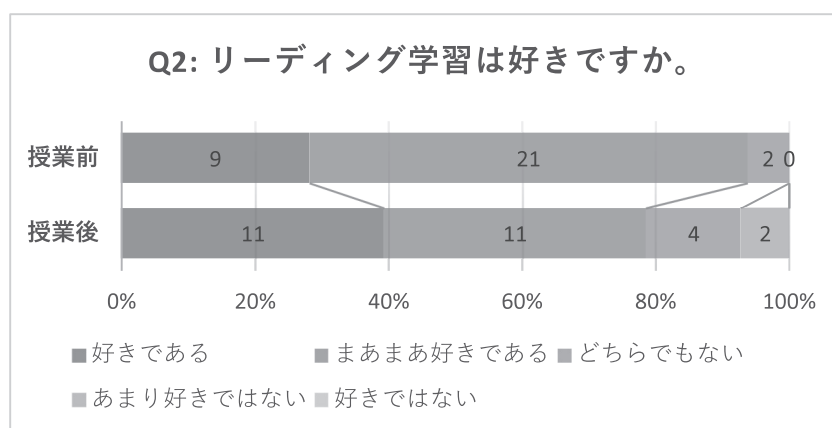


図2 Q2の結果

「好きである」「まあまあ好きである」が授業前で93.7%、授業後で78.6%を占めた。「どちらでもない」「あまり好きではない」が授業後では2名ずつ増加していた。これは本授業が原因である可能性は高く、学習者が「リーディング学習は面白い」と感じられる工夫が不足していたためと考えられる。著者の実力不足として反省しなければならない点である。ただアンケート作成時に本問の「リーディング学習」が何を示すか、著者が具体的に指定していなかったために、この4名の学生が想定した好感を抱けなかった箇所が授業内容なのか、課題（授業外学習）なのか、本授業に限らずリーディング学習全般に対してなのか読み解くことができなかった。この点は今後のアンケート実施時の課題としたい。

Q3では文学教材について、どのような印象をもっているか尋ねた。

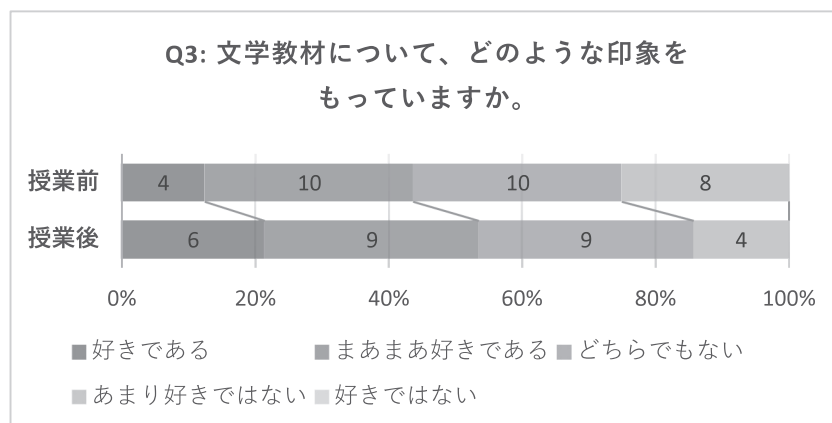


図3 Q3の結果

実際に初回の授業で学生に文学教材のイメージを尋ねたところ「読解力が上がる」「文法を使って文章の構造を検討する」という意見に加え「難しい」「堅い」というネガティブな言葉も上がっていたので、授業前に「あまり好きではない」回答者が25%程度存在したことはある程度想定できた。「あまり好きではない」と回答した学習者が授業前は25%（8名）いたが、授業後では14.3%（4名）にとどまった。授業後ではその代わりに「好きである」の割合が増加している。これは一学期間授業を受講したことで、文学教材によりイメージをあまり持っていなかった学習者たちに何らかのポジティ



ブな変化が起こったと判断していいだろう。

Q4では文学教材を使う授業は、英語力の向上に効果的であると思うか尋ねた。

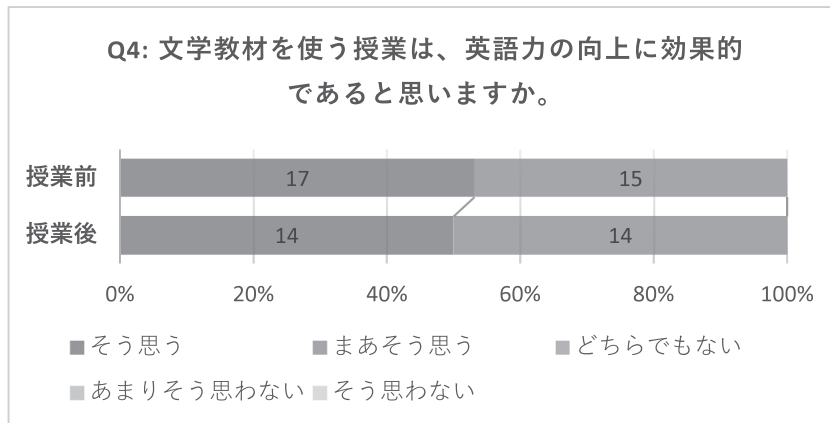


図4 Q4の結果

Q3では文学教材に好印象を持つ学習者が増加していたため、Q4でも同様に増加がみられるかと思われたが、授業前後でほとんど変化はなかった。文学教材に対し、おそらく「面白い」や「興味がわく」というポジティブな理由で「好きである」学習者が増えているにもかかわらず(Q3)、「英語力の向上に効果的である(Q4)」と感じる学習者が増えなかったことについては、学習者が「英語力が向上している/した」と実感できるような授業構成にできていなかった教員側の責任であり、再検討が必要である。

Q5では英語を学ぶ上で文学教材はそれ以外の教材と違いがあると思うか尋ねた。

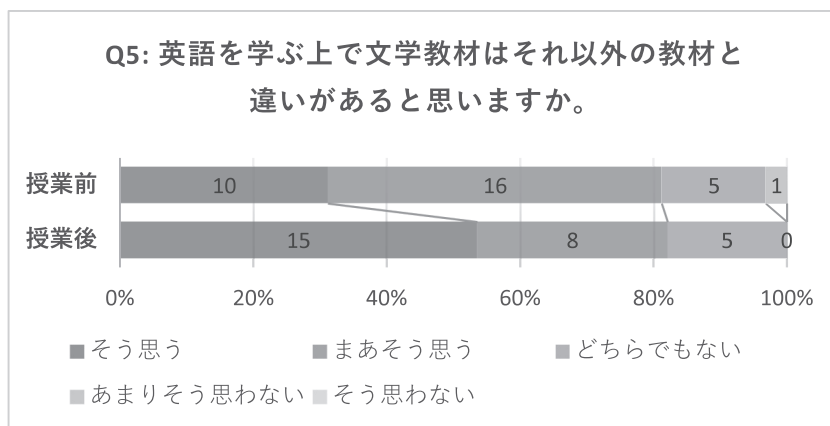


図5 Q5の結果

「そう思う」「まあそう思う」の回答者は授業前後で80%ほどと変化はない。しかし「そう思う」に着目すると授業前は31.3% (10名) だったが、授業後には53.6% (14名) と増加していた。「まあそう思う」より強い「そう思う」が増加したということは、授業を通して文学教材が持つ何らかの独自性を認識した学習者がいたのではないかと考える。

最後に、授業後アンケートのみQ6として授業終了後、感じたことを書いてもらった。彼らのコメントを内容別に分類すると以下ようになる(コメントは原文のままであり、誤字も修正せず掲載している)。

表1 リーディング授業/学習について

楽しい、面白い	内容・文・単語の理解	<p>学生1 いろいろな比喩表現があってひとつの単語でもいろいろな意味を担っていてそれによって文の意味もガラッと変わるのが訳をして楽しかったです。</p> <p>学生11 単純に読めるだけでなく、そこに含まれている意味を探すことも面白いな—と思いました</p> <p>学生6 リーディングは難しいが、丁寧に読むと面白い</p>
	成長を実感	<p>学生5 最初の頃よりも、スラスラと呼んだり、意識をできるようにになったので、成長できているとおもいます。</p> <p>学生14 Readingの授業に対して抵抗があったがとても楽しく学習でき好きになったし英語の力が身についた気がした。</p>
	全般	<p>学生10 楽しかったです。ありがとうございました！</p>

表2 文学教材について

文学作品の内容	楽しい、面白い	<p>学生12 扱う物語が面白かった</p> <p>学生13 文学で英語を学ぶことで楽しく勉強することができ、他の英語の文章を読むときにもスラスラと内容が入ってきて、とても分かりやすかったです。</p> <p>学生21 所々、訳が難しいと思う部分がありましたが、物語の内容が面白いものが多かったのでこの授業を受けることができて良かったと思いました。</p>
	発見	<p>学生7 授業を通して英米文学作品を読み、とても面白いなと感じた。また、独特な言い回しや新しい単語も沢山知ることが出来たので良かった。</p> <p>学生16 自分が面白いと思う作品とそうでない作品で読解の速度の差があることがわかった</p>
	難しい	<p>学生20 訳をする時に、少しニュアンスが違ったりしたのが難しかった</p>
ほかの文学作品	興味	<p>学生2 今まで文学作品をあまり読んでこなかったのが最初は難しかったけど、話の内容が理解できるようになってきて、ほかの作品も読んでみたいと思うようになった。</p> <p>学生18 わたしは日頃から本を読むタイプではないし、文学には全く興味がなかったのですが、読んでいて本当に面白い作品もあって、アメリカ文学を好きになることができました。夏休みに一冊チャレンジしてみたいです。</p>

表3 授業方法について

意見交換	楽しい	学生17 最後の意見を交換するところが楽しかった。 学生19 agree or disagreeという普段ないようなものやっ ていくのは新鮮で楽しめた。
	グループ活動の 追加	学生9 Agree or Dissgree ?においてグループワークがあっ た方がみんなの考えを共有したりまとめたり出来るのであっ た方がいいと思う。
教員の解説	分かりやすい、 面白い	学生3 先生が、丁寧に解説してくれるのでとても分かりや すかったです。ありがとうございました。 学生15 わかりやすい解説で分からなかった本文も理解出来た 学生4 先生の授業がかなりおもしろかった。
	板書の追加	学生8 本文解説の時にポイントとなる語彙・表現を板書があ るとよりわかりやすくなると思った。

まず表1から考察を行う。リーディング学習については、「含まれている意味を探すこと」「丁寧に読む」ことが「面白い」という意見がみられた。テキストに向き合い深く読解することにより、単語の意味の奥深さや内容の面白さを認識することができ、面白いという感情に繋がったようである。この点はリーディングの醍醐味であるとも言え、文学教材であってもそれを十分に味わうことができた様子がうかがえる。加えて「成長できている」「英語の力が身についた気がした」とのコメントからは、学習を重ねるうちに英語力向上の実感ができた様子が見られた。「楽しかった」というコメントは具体的に何に対してか示されていなかったが、リーディング学習全般に対する感想と想定しこのように分類した。

表2は文学教材についてのコメントである。「物語の内容が面白い」「楽しい」という声が複数あがった。第二章の先行研究でも示したように、文学教材は作品の魅力が指導の強みである。このような声が多数上がったことは、本授業でも学習者が文学作品を十分味わうことができたといっていいただろう。加えて、文学教材の学習で「独特な言い回しや新しい単語も沢山知ることができた」というコメントがあった。3. 1で先述の通り、本教材の英文は脚注の補助があるがすべて文学作品の原文を使用している。文学作品は教材となることを念頭に置いて作成されてはいないため、くだけた表現から堅い文章まで表現の幅が広い。もちろんそれは学習の困難さとも表裏一体だが、このコメントのように文学教材は学習者が新しい豊かな表現を学ぶ機会になることがわかる。

次に「面白いと思う作品とそうでない作品で読解の速度の差がある」というコメントについてである。おそらくこの学習者は面白く思う作品、そうでない作品が本教材の中にあり、興味がある作品は早く読解することができたと推察する。まず作品を面白いと感じながら読解する経験ができたことは喜ばしいことである。しかし著者は「面白いと思わない作品ではページが進まないと感じたこと」も同じくらい重要なことだと考える。この学習者は面白い/そうではないと判断できるレベルまで文学作品を読解でき、自分の読解速度に冷静な分析ができているからである。以上のように「面白い」というコメントが多数見られたが、第二外国語である英語の作品で面白さを感じることができているという点はある程度の英語習熟度を示しているといってい。この点を学習者に認識させることで、先ほど課題として述べたQ2リーディング学習の楽しさ、Q4英語力向上の実感に繋がられた可能性が

ある。

一方、「ニュアンスが違ったりしたのが難しかった」という声も上がった。例えば助動詞willは未来を表すと認識している学習者は少なくないが、会話文では話し手の意思を表していることも多い。授業内でこのような単語・文法のバリエーションに触れたことが難しく感じた原因と推察される。これについてはリーディング指導で教員が越えなければならない一つのハードルともいえる。学習者が理解しづらい箇所へのヒントの提示や理解できなかった箇所のフィードバックの工夫を行い、「バリエーション豊かな文章を読解することは困難でもあるが、楽しい」と学習者が感じられることを目指したい。

加えて、「話の内容が理解できるようになってきて、ほかの作品も読んでみたいと思うようになった」「文学には全く興味がなかったのですが、読んでいて本当に面白い作品もあって、アメリカ文学を好きになることができました。夏休みに一冊チャレンジしてみたいです。」と授業で扱った文学教材から他の作品に興味を広げた学習者も複数見られた。授業終了後は学習者それぞれに常時指導することはできないので、授業内で各学習者の学習習慣づけとモチベーションの維持する工夫を行うことは非常に重要である。文学教材の場合、作品の持つ面白さからさらに興味関心を広げやすい。また教材の選択肢は無限大にあるとあっていい。このように興味が広がった学習者に対して他の作品の紹介ができることも文学教材の強みである。

表3は授業方法についての感想である。文学教材の英文読解後、教科書のAgree or Disagree? を用いて意見交換を行ったことについて「意見を交換するところが楽しかった」「新鮮で楽しめた」という声はいくつか上がった。文学作品はすべての心情や行動が明示されているわけではないため、学習者自身が限られた描写を分析し検討する必要がある。解釈の仕方には正解もないことから、多様な意見を共有できたことが学習者の興味を引いたようである。Agree or Disagree? には作品の本質を問う鋭い質問が多く、同じ文学作品を読解しても異なる意見が生まれ、教室が盛り上がっていた。3. 3で先述したように自分の意見を持ち根拠を示しながら発表する練習を兼ねていたので、学習者にとっては簡単なタスクではなかったと思うが意見交換の楽しさを感じることもできたようである。

Agree or Disagree? に対しては「グループワークがあった方がみんなの考えを共有したりまとめたり出来るのであった方がいいと思う」という意見も上がった。これはおそらくグループごとで話し合い、意見を共有しまとめたうえで発表すべきという指摘だと推察する。授業内では学習者同士の友人関係などに配慮し明確にグループ分けをすることはせず、近くに座っている人と意見交換、その後個人で発表する構成にしていた。Agree or Disagree? はタイトルからも明らかなように、賛成派と反対派二つに分かれるような問いである。そのため、完全にグループワークを導入するとグループとしてどちらかに意見をまとめる必要があり、本来の自分の意見とは異なるものをグループの考えとして発表することが想定された。そのため近隣の学習者同士の意見交換に留めていたという経緯がある。しかし、後中(2014)の協同学習で行うリーディング授業の研究もあることから、どこまでグループワークとするかは今後検討したい。

続いて教員の解説について「丁寧に解説してくれるのでとても分かりやすかった」「わかりやすい解説で分からなかった本文も理解出来た」「先生の授業がかなりおもしろかった(著者注:解説を指すと判断しこちらに分類)」という複数のコメントがあった。これは著者の解説の仕方が学生の好みと合致していた可能性もあるが、教材が文学作品であったため、あらかじめ物語のオチがあり教員側

も話しやすいということが影響していたと推測される。文学作品の難解な点を乗り越え、面白さを感じることができた学習者に敬意を表したい。解説に関しては「本文解説の時にポイントとなる語彙・表現を板書があるとよりわかりやすくなると思った」というコメントもあがった。本文読解の際にキーワードになる箇所や学習者が理解できていなかったポイントについてはその場で板書を交えながら解説を行っていたが、おそらく不十分なところがあったと推測されるので、さらに板書やPowerPoint資料を活用し丁寧な解説を行いたい。以上のようにQ6の授業後の感想は任意の自由記述の質問であったが、全体的に肯定的な内容のものが目立った。

#### 4. まとめと課題

今回一学期間文学教材を用いたリーディング授業を受講したことで、学習者が持つ文学教材に対する感情にはおおよそ好意的なものに変化していた。文学教材のテキストを読解することにより、単語の意味の奥深さや作品の面白さを認識することができ、面白い・楽しいという好意的な感情に繋がっていた。文学教材の奥深さは学習の困難さとも表裏一体だが、文学作品を用いた学習で新しい豊かな表現を学ぶことができたと考え、文学教材が持つ何らかの独自性を認識した学習者も見られた。授業後には他の文学作品にも興味が広がった様子が見られた。また文学教材の読解では、多様な意見を共有できたことが多くの学習者の興味を引いた。

しかし、文学教材に対する考え方は変わったものの英語力の向上に効果的かという問いに対する回答は授業前後で特に変化は見られなかった。文学教材の持つ魅力は伝わったが、学習者が英語力向上の実感を伴えるかどうかは教員の教授法や授業構成に課題があり、再度検討が必要である。解説の際にも板書やPowerPoint資料を活用し丁寧に行うことが求められる。また、どこまでグループワークを導入するか十分な追究が必要である。

今回の分析では分析対象者がTOEIC550点を目指す層の学習者であり、リメディアル教育を必要とする学習者への効果測定はできなかった。そのほかにも日本における文学教材を用いた研究は実証が十分にされていない点もあり、課題が多く存在する。読解力を測るテストの作成方法や、文学教材を英語科目内で指導できる教員養成はその一例である。

検討すべき課題もある一方で、今回の結果から文学教材を用いたReading授業は一般に知られているような否定的な評価ばかりではないことが分かった。少なくとも学習者は文学教材を用いた学習の楽しさや面白さを発見することができていた。文学教材は学習者の興味関心を高め、さらなる学習へのモチベーションにつながる可能性も秘めている。今後も文学教材を用いた英語教育研究実践の蓄積がなされることを期待する。

#### 【参考文献】

- 木村博是・木村友保・氏木道人（編）（2010）『リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的に「読む」・「書く」』、大学英語教育学会（監修）、大修館書店
- 久世恭子（2011）「文学教材を用いた授業—大学の英語教育における事例研究—」、『言語情報科学』第9号、63-79
- 文部科学省（1999）『高等学校学習指導要領』国立印刷局
- 中村愛人（2003）「英語教育における文化教材としての文学作品の意義」、広島大学大学院教育学研究

科紀要第二部文化教育開発関連領域、第52号、115-119

- 西原貴之（2010）「英語教育における「文学的文学教材」開発のための一考察—テキストの書記素論的特徴に焦点を当てて」、*Journal of Quality Education*、3巻、95-110
- 西原貴之（2014）「文学を使った英語教育研究の現状と課題」（第36回中国四国イギリス・ロマン派学会発表資料）、<https://home.hiroshima-u.ac.jp/ntakayk/presentation25.pdf>、2021年9月19日アクセス
- 岡田善明（2013）『英語教育の精神と実践—コミュニケーションから英米文学まで』、春風社
- 小野章・平川真・柿元麻理恵（2016）「教師による文学解釈が学習者の読解に与える影響」、*広島外国語教育研究*、第19号、213-224
- 関戸冬彦（2011）「英語教材としての文学作品の可能性—ヘミングウェイ作品の場合—」、*横浜国立大学大学教育総合センター紀要*、第一号、28-35
- 高橋和子（2015）『日本の英語教育における文学教材の可能性』、ひつじ書房
- 田口誠一（2015）「英語教育における文学教材の意義について—O. Henryの” After Twenty Years” をめぐって—」、*尚絅大学研究紀要人文・社会科学編*、第47号、1-14
- 田口誠一（2016）「英語教育における文学教材—O. Henryの” A Retrieved Reformation” とそのリトールド版を中心に」、*尚絅大学研究紀要人文・社会科学編*、第48号、71-84
- 後中陽子（2014）「協同学習をとり入れた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告—イギリス文学の散文の場合—」、『*外国語教育フォーラム*』、第13号、79-98

